

# 2008 年度学校評価に関する外部評価報告書

関西大学第一中学校・高等学校、関西大学北陽高等学校、関西大学幼稚園



2009 年 12 月

学校法人関西大学 外部評価委員会

## はじめに

小さな営みが、今、大きな扉を開こうとしている。学校教育法及び同施行規則に基づき、関西大学の併設校における自己点検・評価が2008年度からスタートした。この企図するところは、学校の進むべき方向を明確に示し、自らの立ち位置を確立し、自己の教育力を高め、生徒一人ひとりの学習をいかに向上させられるかである。

今回は初回ということで、他校での実施状況を参考にしながら、専任の先生方を対象に、39項目にわたりアンケート形式で実施した。その結果は、それぞれ委員会において分析され報告を受けた。しかしながら、それが内輪の傷のなめ合いで終始することは許されない状況にある。

そこで、4名の先生方に外部評価委員をご依頼し、忌憚のないご教示をいただくことにした。外部評価委員の先生方には、全く白紙の状態でご自己点検・評価結果と委員会の分析をお読みいただいた。その結果得られたコメントをストレートに掲載している。概ね、評価結果は良好であるが、我々が懸念していたところについては「やっぱり」と言ったところで、みごとにご指摘を頂戴した。これらのご指摘の改善なしに併設校の今後の発展は望めないと考えている。各併設校においては、これらのご意見一つひとつを組織の課題とするだけでなく、自らの課題と位置づけ、生徒の人格形成と学力の向上につながる改善とその実現に向け、誠実に取り組まねばならない。

丁寧にお読みいただき、明快なご意見をいただいたことについて、外部評価委員の先生方に紙面をお借りしお礼申し上げたい。

今回、外部評価委員が指摘した共通課題は、「組織が一丸となった取組み及びそのためのシステムが不十分である。」と集約することができる。これまで多くの課題も個々の先生方の努力に頼りがちであった。何としても、学校は個から集団指導のシステムへと改革していかなければならないし、そうでないとPDCAサイクルを回すことすらできないであろう。幸いに、アンケートを見ると、多くの項目がAとBの合計で70%から90%を占めており、各先生の理解と認識に問題はないようである。これらの力を如何に一丸とするか。構成員の意識改革をどのようなシステムで実施していくのかが今後の課題であるということが、今回の点検・評価で明らかになったと言える。

さらに、2010年に開設される高槻ミュージックキャンパスにおける初等部、中等部、高等部そして大学までの一貫教育体制にまで言及いただいた。まさに、日本における一キャンパス、16年間一貫教育という初めての試みであり、そこに従事するすべての構成員の意識とそのシステムの完成度が評価の分かれ目となるであろう。日本初の壮大な試みが、単なる試みで終わらないよう、今回の点検・評価の中からそのヒントをひとつでも多く吸収してくれることが望まれる。

2009年12月17日  
学校法人関西大学 外部評価委員会  
委員長 小西 靖洋

## I 外部評価実施概要

### 1 評価日

2009年 10月 1日 (木)

### 2 評価者

外部評価委員 4名

### 3 評価対象

2008 (平成 20) 年度学校評価結果

## II 外部評価委員からの総評

評価者	A
-----	---

学校法人関西大学は、高槻ミュージックキャンパスに新規に「初等部」を設置すると共に、北陽キャンパスにも中学校を新設することである。このことは、既設の幼稚園を加え、大学までの接続を視野に入れた「一貫教育」の仕組みが構築され、学校法人として、新たな飛躍の段階にあることを意味する。関西の私学の雄であり伝統的な私立大学の重要な一角をなす関西大学に、こうした教育システムが構築されることは、関西地区の教育の発展に多大な貢献をもたらすであろう。

第一高等学校・第一中学校等の既設の学校・園については、確立された教育方針の下、集団との調和を保ちつつ個の自立を尊ぶきめ細かくで特色ある教育が展開され、全体として評価できる。新設校を含む他の学校も、上記既設の学校・園との連携の下、その各々の特色を発揮しつつ、学園全体としての教育理念・目標等への認識共有を基礎に、系統的な教育システムが構築されていくことを期待する。

評価者	B
-----	---

各学校・園とも健全な運営が実施されているものと判断できる。とりわけ、学校評価の法令化に合わせて、学校法人全体で自己点検・評価活動にいち早く取り組み始めた点は、名門の学校法人にふさわしい見識ある取組として高く評価できる。関西大学北陽高等学校に関しては、合併初年度であり、その動向に関しては、今後も注視する必要があるが、今回の自己点検・評価結果が組織的に活用されることが強く望まれる。自己点検・評価活動は、誠実に行われているが、現段階では、アンケート集計の分析や、現状の記述にとどまっている傾向がある。今後は、PDCAサイクルに基づく内部質保証システムの確立を目指して、項目別の目的と課題を明記するように工夫すれば、外部評価の意義もさらに大きくなるであろう。優れた運営が実施されているので、今回の自己点検・評価結果を積極的に公表して、他校に先進的モデルを示すことが大いに期待される。

評価者	C
-----	---

学校評価は、「教育活動その他の学校運営の成果を検証して必要な改善を行うことにより、幼児・児童・生徒がより良い教育活動等を享受できるよう教育水準の向上と保証を図ること」にあります。

そのためには、まずはデータが必要ですし、その上でデータの読み方が課題となります。例えば、

A評価とB評価を合計して概ね評価が高い、あるいは達成できていると読むことは可能ですが、A評価が少なく、B評価とC評価が比較的多いという項目は、課題があると読むべきでしょう。さらに、C評価が多い項目は改善が急がれる項目と言えます。

そして、自己評価は学校関係者評価、とりわけ生徒や保護者の評価との関係性を比較対照しなければ教職員の自己満足になる危険性があります。その意味で、生徒や保護者の評価の作成と実施、教職員の自己評価との比較分析が学校評価の一番の眼目ですので、今後の取組、資料提供を期待します。

評価者	D
-----	---

関西大学第一高等学校・第一中学校、関西大学北陽高等学校、関西大学幼稚園は、全体として、概ね良好な自己評価の結果をえていると言える。特に私学の独自性の項目である教育方針、教育目標、愛校心の評価は高い。これは私学にとって生命線であるから、今後さらにこれを高めるよう努力すべきである。とりわけ、この部分の自己評価で「A」がさらに多くならなければならない。

その際に懸念されるのは、教員相互の援助体制が弱いと認識されていることである。会議の有効性をも合わせて、改善を要する。

教育の内容としては、国際化教育にはさらなる改善が求められている。グローバル化社会で生きていく生徒の将来を考えると、国際化教育・異文化理解といった項目は今後ますます重要になるであろう。全学挙げて取り組むことが望まれる。

伝統ある関西大学がもつ強みをさらに伸ばし、課題を解決する取組を全学で展開することを期待する。

### Ⅲ 学校別 外部評価委員からの意見・提言

#### 1 関西大学第一中学校・高等学校

評価者	A
-----	---

教育方針・教育目標は適切で、自己評価集計結果からも、構成員に十分浸透していると思慮される。

教育内容・方法についても、方針・目標が十分かつ適切に具体化されており、評価に値する。とりわけ、中・高・大の連携を視野に入れた教育指導はきめ細かになされている。年度を問わず安定的な進路実績を挙げていることから、進路指導の面でも、優れた実践が行われていることがうかがえる。「国際化教育」については、上記自己評価結果において、他の項目に比し、低い値が示されている。国際化教育は、書面で見ると、英会話重視の語学教育に偏しているようにも見受けられる。しかし、その評価項目が「異文化理解」とされていることに鑑みても、「関西圏」に位置する学校としての地の利を活かした何らかの教育上の工夫をしていくことが望まれる。

関連する事柄として、高・中とも、その自己分析における「生徒の成長段階に応じた行事の組み立てがなされている」と自身が評価するように、宿泊行事を含む特別活動の充実度は高いと判断できる。

「保護者との連携」については、教育指導、生活指導の両面から、充実した指導がなされている

といえる。但し、生徒や親たちを取り巻く昨今の生活環境、社会環境には、これまでにない厳しいものがあり、生徒が生活上の不安を感じることなく自身の進路を見定め、安んじて学業に励めるような配慮措置の充実を期して、保護者との連携を一層密にしていくという視点も今後重要であると考えられる。

なお、頂いた基礎データについて、(私の理解不足があるのかも知れないが)、「学校教育計画」20頁の「生徒人数一覧」を見る限り、「高校」の3年の女子生徒数の減少が他と比してやや目立つような印象を受ける。(そういう実態があり、それを問題と認識されているという前提の話ではあるが)その原因と問題解決策の検討を望むところである。

評価者	B
-----	---

学校運営に関しては、おおむね順調に行われている。とりわけ、私学の独自性を問う項目について、高い自己評価が示されており、関西私学を代表する学校にふさわしい結果として高く評価できる。その教育目標を達成するため、教育課程も十分に整備されている。ただし、大学連携授業などの推進に関しては、今後の課題も残っており、個性豊かな一貫教育の展開がさらに望まれる。学校業務が煩雑になる中、会議の負担が増加することはやむを得ない点もあるが、意思決定プロセスの明確化に向けて引き続き努める必要がある。

教育内容に関しても、伝統ある学校にふさわしい水準に達している。保護者との緊密な連携を実現して、家庭教育と学校教育の接合に組織的に努めている点は、中等教育として見識ある方針であり高く評価できる。現在中等教育に切実に求められている現代的ニーズに応えるために、情報モラルの指導などを正課授業の中で明確に位置づける工夫について、今後もさらに組織的な検討作業が必要である。今後の最大の課題は、国際化教育の充実であろう。ネイティブ教員による英語運用能力養成にも既に積極的に取り組んでいるが、関西私学を代表する学校にふさわしい国際化推進体制が強く望まれる。

生活指導・生徒支援に関しても、保護者との連携を適切に保ちながら、健全に行われている。とりわけ、教員の負担が大きい部活動の指導にも成果を挙げている点は、総合的な人間性を育成することを主眼とする私学の地道な取組として高く評価できる。他方、キャリア教育については、教員の個人的努力や経験知に依存する点も少なくないので、大学との連携を推進しながら、一貫教育の利点を最大限に活かす組織整備が必要である。

学校評価に組織的に着手したことは、先進的な取組として大いに高く評価できる。今回の学校評価の結果を踏まえて、教員の教育支援体制のさらなる充実が強く期待される。

評価者	C
-----	---

関西大学第一中学校・高等学校においては、自己評価において、教育方針・目標・愛校心の共有化が図られ、コンプライアンスと年間計画に基づいて諸活動が確実に実施されております。その結果、教育内容においては、基礎学力の習得・向上、学習環境の美化、中大・高大連携、生活指導、生徒会活動、特別活動において、高い評価と満足度を示されています。

ただ、平成20年度自己評価においては、学力不足生徒への対応、情報教育、人権教育、国際化教育、大学連携事業の環境整備、進路指導體制、キャリア教育などの項目では、A評価よりもB及びC評価が多く見受けられます。

このことについて、教員自身が厳しく自己評価されているわけですから、問題意識を持って改善

を図られる内的動機が整っていると考えます。その観点から、平成21年度に向けて、校長は授業時間の確保、学習環境の整備、徳育面の指導、中高大の連携、キャリア教育の充実などの改善策を掲げられており、とりわけ、平成21年度学校教育計画には、4ページにわたって中高の補習計画を掲載されており、大いなる熱意を感じるところあり、本年度の進捗状況に期待を寄せます。

次に、学校運営及び教員の活動に関する項目については、ディスクロージャーや危機管理面では概ね高い自己評価を示していますが、教職員連携及び教員の活動については、B及びC評価が多く、とりわけ教員相互の援助体制、中高の情報共有については、C評価が最も多い項目となっています。

この点については、校長の改善策にも「中高の緊密な体制」「教職員の密接な連携と会議の充実」を挙げられていますが、例えば、校内ICTの活用などによる情報の共有化や会議の効率化などについて具体的な取組が求められると考えます。

評価者	D
-----	---

関西大学第一高等学校・第一中学校は伝統校らしく、多くの点で満足はいく自己評価の結果をえている。このことを認めた上で、以下では、特徴ある点、改善が期待される点に言及する。

- ① 私学の独自性はきわめて重要である。この点はよく浸透しているという認識が示されているが、それで満足すべきではない。「教育方針」「教育目標」の評点では「B」が多いので、今後、自己評価において「A」が増えるよう努力することが望まれる。
- ② 危機管理における「生徒への周知」はなお評点が低い。『平成21年度学校教育計画』においても前年度の『平成20年度学校教育計画』と記述が変わっていない。この点、自己評価を踏まえて一層効果のある方策を検討すべきである。
- ③ 教育内容のうち、「情報教育」「人権教育」「国際化教育」はなお課題を残している。この点は校長の「改善策」に盛り込まれていない。『平成21年度学校教育計画』においては「4(4)重点項目」(p.6)において、以前の経験に基づいて種々検討されたことがわかるが、「人権教育」「国際化教育」の記述は従前と同じであり(p.5)、具体策が求められる。
- ④ 一貫校の常として、生徒支援のうち「進路指導体制」「キャリア教育」に「A」評価が少ない。『平成21年度学校教育計画』では、「3.教育指針」において「キャリア教育の推進」(p.1)を追加し、また「3(2)②に産・公・学の連携の実践」(p.3)をも追加しており、改善への試みの姿勢がみとれる。このことは校長の「改善策」にも詠われているので、平成21年度の成果に期待する。
- ⑤ 教員の活動に関する自己評価はかなり低い。校長の「改善策」に「研修」が記されているが、その内容が見えにくい。

## 2 関西大学北陽高等学校

評価者	A
-----	---

北陽高校は、創立83年の伝統を誇る一方、「関西大学北陽高等学校」としては、初年次であるとのことである。手許の書面からも、伝統の継承と「新たなステージへの飛躍」という2様の期待や要請を肯定的に受け止め、共に満たしていくために最善の努力を傾注しようとしている同校関係者の姿が目につく。加えて、「自己評価集計結果」の各項目において、B評定の部分に、回答がより多く集まっていることは、各回答者が、今後の当校の方向性に理解を示しつつ、現在の自身の立ち位置を奈辺に置くべきか、判断に迷う状況にあることを如実に物語っているものと考えられる。

当校には、「躰」教育を重要な教育的営為として位置づける中で、新入生のマナー（とりわけ女子生徒）への指導上の対応に苦慮されているとのことである。また、習熟度の遅れた生徒への取組みを含む教育力の更なる強化が大きな課題として認識されているとのことである。これらの課題の解決に向けどのような調整が可能なのかという点については、当校自身、問題点として認識されているように、教員スタッフについて一層の充実が求められるのであろう。加えて、「関西大学」を設置者とする教育機関に生まれ変わったことに伴う教育方針・目標や教育指導、生活指導の在り方に対する教育スタッフ全体による認識の共有化、そうした認識の共有化を前提とした教員研修等の充実を図っていくことも重要であろう。場合によっては、生徒との組織的な対話を重ねる中で、上記課題に対する解の手がかりを見出すことも期待できよう。

北陽キャンパスには、新たに、中学校も設置されるとのことである。関西大学はもとより、既設の「第一高等学校・第一中学校」とも連携しながら、中・高・大の連携を視野に入れた教育指導の在り方について、さらなる検討を重ねることも、もとより重要である。

評価者	B
-----	---

2008年度に関西大学北陽高等学校として初年度を迎えた本校にとって、当面の最大の課題は、合併の精神が構成員によって共有されていることであるが、「自己点検・評価」において90%を超える肯定的な回答が得られている点は、合併事業が組織的に順調に推進されていることを示しており高く評価できる。従来とは異なる学力層の生徒を受け入れるために、「公開・研究授業」を各教科で実施していることや、男女共学体制に移行するに際して、女子教育の明確な方針を策定している点も、見識ある教育的取組として評価できる。

学校運営に関しては、合併を実現した経営方針が構成員によって十分に理解されており、おおむね良好に行なわれていると判断できる。教員と事務職員の連携体制が確立していることは、建学の精神に基づいた個性ある教育活動を推進していくための優れた伝統として高く評価できる。それに比べると、教員間の連携には、改善の余地があり、組織的な支援体制の充実がさらに望まれる。また、名門の関西大学と合併した利点を最大限に活かすために、これまでは若干不十分であった地域貢献にも明確な方針を策定することが必要であろう。

教育内容に関する「自己点検・評価」において、習熟度の遅れた生徒の対応や、社会規範やモラルに関する指導に関しては、課題も多いことが示唆されているので、今後、明快な教育方針を具現化するための組織的な取組が必要である。とりわけ、「健康な身体作り」に関しては、半数以上の教員が指導不十分と判断している事実は、重く受け止めるべき点であり、総合的な指導体制の確立が検討されるべきであろう。

合併によって新たなスタートを切った初年度から、「自己点検・評価」を組織的に実施したことは、教育機関の取組として高く評価できる。生徒指導・生徒支援体制に関する豊かな実績を基盤として、「面倒見のいい学校」という優れた伝統を発展させることが強く期待される。

評価者	C
-----	---

関西大学北陽高等学校は、平成20年度から関大北陽1期生を迎えられ、これまでの北陽高校の伝統の上に、新たな歴史を創られようとしているイノベーションの只中にあります。その意味では、混迷や不安を内包しつつも、創造と革新に向けて教職員が一体となって取り組んでおられる様子が自己評価の中にもありありとうかがえます。

それは「学力を高める。人間力を高める。教育する力を高める。」を合言葉に、高い学力層の生徒の組織的教育、新たに受け入れる女子生徒への指導体制の確立を柱として掲げられ、着実な新校づくりを成し遂げられつつあるという点です。このことについて高く評価されるべきだと考えます。

具体的には、合併の精神、授業の公開、教員と事務職員の連携、基礎体力の向上、保護者との連携、個別指導、カウンセリングなどの項目において高い自己評価が見られます。

しかし、一方では、優れた伝統である「挨拶」や登下校のマナーが1年生に浸透していないなどモラルの醸成、社会規範の理解、スローラーナーへの対応、情報モラルの指導、食生活などの健康な身体づくり、生徒会活動支援などにおいてB及びC評価が多くなっていることは課題と考えます。

また、学校運営面や教員の活動面でも、教員間の連携や会議の有効性、生徒指導における組織的な指導体制、教員の研修体制や教員相互の援助体制などにおいても、B及びC評価が多く、新しい学校への移行と課題への対応、新しい教員層の採用などの状況にあることを勘案すると、教師集団の組織づくりが急がれるところです。

校長の意見書にもあるように、「堅持すべき部分」の継承と高大連携による学習面での「面倒見のよさ」や国際化への対応の進化が図れるなど、今後の発展に期待するところです。

評価者	D
-----	---

関西大学北陽高等学校は合併後の初年度であることから、長く関西大学の一員として発展してきた第一高等学校に比して、なお課題が山積しているように見受けられる。しかし、これは致し方ないと考えられる。その点は『平成20年度学校評価(自己評価)分析』にもよく表れている。その認識を示した上で取敢て言うならば、全般的に自己評価で「B」「C」が多く、改善の余地が大きい。以下、いくつかの点を指摘する。

- ① 学校運営では、教員間連携、会議の有効性などに課題がある。校長の「意見書」ではこの点について「各人の自覚」が重視されているが、それに加えて組織としての対策も必要であると思われる。
- ② 学校運営のうち危機管理に問題が多いと感じる教職員が多いが、次年度以降の訓練・研修が提案されているので、その実現に期待する。
- ③ 地域との連携にも課題がある。地域で愛され信頼される学校になることはきわめて大切なので、なお一層の努力を期待する。
- ④ 教育内容では、「C」評価が1/3を超える項目が12項目のうち6項目(半数)を占めている。それは何を意味するのか、どう改善すればいいのかについて、教職員が共通認識を持って取り組むことが肝要である。
- ⑤ これに関連して、教職員の意識の統一が厳しい評価をえた。『分析』ではこの点に触れてはいるが、その原因究明、対策については記述されていない。
- ⑥ 「国際化教育」についても評価がやや低い。『分析』においても校長の「意見書」においても、帰国生・留学生については少し触れられているが、オーストラリアへの語学研修には触れられていない。語学研修も含んだ幅広い活動の評価・検討が必要であろう。

### 3 関西大学幼稚園

評価者	A
-----	---

当園における3つの保育の基本方針は、保育目的に照らし適切で、ある程度の特徴も認められる。

また、当園の教育内容・方法も、「年少」、「年中」、「年長」といった子どもの発達段階に応じた、個別具体のきめ細かな配慮がなされている。また、そこで行われている教育内容にあってはその教育方法と相俟って、上記3つの方針に則して行おうとする努力が随所に認められ評価できる。とりわけ、「協同性の涵養」、「自主性の陶冶」を図るための教育実践は、相当程度果たされており、それらは、とりわけ、年長組みで行われる「ものづくり」に関わる教育活動において顕著である。

保育における保護者との連携策も充実していることがうかがわれる。子どもの成長を親と担当教諭等の協働で確かめ合う制度が機能しているように見受けられるほか、機関紙「はぐくみ」、「太陽と大地の会」にも当園独自の伝統と方向性が認められる。

ところで、今日の幼い子どもや若い親たちを取り巻く生活環境、社会環境には、これまでにないほど厳しいものがある。親や担当教諭等の価値観にも、一層の多様化が進んでいるのではないかと推察される。こうした厳しい環境の中にあって、また、子どもを取り巻く人々の考え方が様々である中で、当園の園児たちが、自身の確かな「幸せ」を信じ自立して成長していけるよう、子どもたちの成長を園で支える教育スタッフの研修制度の一層の充実が望まれる。

最後に、高槻新キャンパスに小学校（初等部）の設置が予定されることに伴い、それとの連携・接続の方途については、十分な検討がなされてきたとのことである。伝統ある大学を擁する非宗派系の学校法人の設置する幼稚園として、大学に至る一貫教育も展望した教育目標、教育方針の模索を切に望みたい。そのことが、当園に対し、新たな教育上の価値と特色を付与する契機となるであろう。

評価者	B
-----	---

「自主性の陶冶」、「共同性の涵養」、「生きる力の育成」の三本柱を掲げた教育方針は、明快で見識ある幼稚園運営の基本方針として高く評価できる。教育方針を実現するために、リズム運動など3年間繰り返し経験する活動によって一貫性を保持しつつ、年長組においては、こいのぼり作りやマフラー編みなどの達成感を体験させるための活動を取り入れ、合理的な教育内容編成が実現されている。また、5000冊近い絵本を所蔵して、読書習慣形成にも組織的に取り組んでいる点は、家庭との連携を深める取組として高く評価できる。

幼稚園運営において特に重要な保護者への働きかけについても、保護者の参観を奨励しつつ、個人懇談会、クラス懇談会、グループ懇談会などを定期的に開催し、組織的な取組が順調に実施されていると判断できる。年4回発行される機関誌「はぐくみ」は、保護者と教諭のネットワーク作りに大きな効果を挙げており高く評価できる。

幼児教育と初等教育の連携を視野に入れて、在外研修、国内研修、園内研修を組み合わせた研修制度を整備し、教育職員としての資質向上に組織的に取り組んでいる点は、定評ある一貫教育体制を持つ幼稚園にふさわしい取組であり、今後の益々の充実が期待される。子育て支援に関しては、子どもを中心にした方針が明示されており、保育日によって構成メンバーが変わることがないように配慮されている点は、2歳児親子教室や教育相談の実施と合わせて、名門幼稚園の見識ある保育活動として高く評価できる。

教職員数が幼稚園設置基準を満たしていない点は、法令的にも問題があるので、早急に改善が必要である。中期計画の策定においては、教職員の適切な採用計画を明確に示すことが求められる。

自己点検・評価にすみやかに着手した点は、高く評価できるが、現状の取組の羅列になる傾向が

ある。今後、PDCAサイクルを意識して、各項目別に目的と課題を明記することが望まれる。

評価者	C
-----	---

関西大学幼稚園の自己評価は大変きめ細かく、丁寧なものとなっています。それは日ごろの教育保育活動の姿そのものであろうと推察されます。

保育の基本方針として、自主性の陶冶、協同性の涵養、生きる力の育成を掲げ、リズム運動・人形劇・うた・ぬらし絵などをはじめとした子どもの主な活動を通して獲得すべき資質を明確にされています。また、図書の貸し出しや各種懇談会、ワークショップ、連絡帳などのきめ細かい保護者への働きかけによって子どもを保護者と一緒に育てていこうという園の姿勢がよく見て取れます。

ただ、ここでの自己評価は、「今年度（評価初年度）の学校評価の点検・評価結果について」において記されているように、あくまでも教育保育活動について「現状を明確に表現すること」に力点が置かれているため、教職員が個々にどう自己評価し、園総体としても自己評価しているのかという点については不明です。

この点については、中高等学校の評価項目を参考にしながら、幼稚園に相応しい評価シートを作成することが急がれると考えます。そのためには、個々の取組ではなく、評価の観点と評価項目の整理が求められるところです。

今後、自己評価のシステムがよりよく整備されて、関西大学幼稚園が保護者とともを一層発展することを期待しています。

評価者	D
-----	---

評者は幼稚園の現状と課題について見識をもたないので、『関西大学幼稚園の教育』『関西大学幼稚園の教育2』に目を通した上で、もっぱら「平成20年関西大学幼稚園評価資料」にもとづいて意見形成することとした。そのため、「印象」の域を出ないコメントとなることをお断りしておく。

- ① 教育方針は明示されている。
- ② 教育内容について、「ねらい」「現状の取組」は明確に示されているが、「自己評価」が記載されていない。「長所」が記載されている項目もあるが、「評価資料」なのであるから、各項目について「自己評価」を合わせて記載していただきたい。
- ③ その中で、例えば、「給食・お弁当について」(p.11)、「教職員数」(p.19)、「安全にかかる配慮」(p.20)については「課題」や「方策」が示されている。このうち、「給食・お弁当について」と「安全にかかる配慮」は、それぞれ「食の安全」「通園の安全」に関わることであるので、改善すべき点について具体的な方策を検討し、速やかに実施することが必要である。
- ④ 教育職員数については「幼稚園設置基準」を遵守すべきである。

## IV 外部評価を受けての学校の所見・改善策等

### 1 関西大学第一中学校・高等学校

【学校長名 豊島 光男】

学校運営については、一定の評価をいただいているが、関西大学の併設校としての特性をさらに確立したものとしていきたい。特に、危機管理への取り組みについては、全ての生徒、保護者にとって、心から安心安全を実感できる学校の実現をめざし、今後も取り組んでいきたい。

教育内容は、ご指摘いただいているように「情報教育」「人権教育」「国際化教育」などについては、具体的な教育内容の充実策を検討していかなければならないと思っている。とりわけ「国際化教育」について、関西という地の利を生かした教育内容を検討していかなければならないというご意見についてはたいへん参考となるものである。

本校教育のひとつの柱としているキャリア教育については、併設校の利点を十分生かし、中学と高校そして大学との連携をさらに推進していくことにより、よりその教育の実をあげていかなければならないと考える。

自己評価の分析をもとにした改善策や外部評価委員の方からのご意見を、各教科・部会でさらに検討し、今後は具体的な方策を打ち出していくこととしたい。

## 2 関西大学北陽高等学校

### 【学校長名 鈴木 清士】

はじめに、4名の外部評価委員の方々から頂いた本校に対する評価のうち、「改善すべき課題である」と共通にご指摘を受けた項目を整理すると、次の2点にまとめることができる。

- (1) 学校運営における教員間の連携（相互理解と信頼関係）、会議の効率的運営に課題がある。また生徒指導における教職員の意識統一や教員の活動における教員相互の情報交換や協力体制が弱い。
- (2) 教育内容において、習熟度の遅れた生徒への取り組みや、社会規範やモラルに関する指導、食生活などの健康な身体作りへの意識づけに関して課題が多い。

次に、上記の課題について、まずは所見を述べることにする。

まず「組織としての体制作り」ということであるが、教員と事務職員との連携については良好であり、問題は教員間の連携ということになる。校長の意見書では、生徒のマナー指導ができていない点と教員組織が十分に機能していない点をリンクさせ、「教師自身の自覚があってこそ組織は機能する」と述べ、教師自身が率先して模範を示す態度を強調させていただいた。

しかしながら、一方では習熟度の遅れた生徒への取り組みや、併設校としての学力向上への取り組みを考えると、教師一人の自覚や努力だけでは到底解決できない問題であり、今回の外部評価で組織的な展開の弱さが指摘されたのもその通りであると考えます。

習熟度の遅れた生徒への取り組みができていない理由については、校長の意見書では「教員スタッフの絶対数の不足にある」と書かせていただいたが、実はそれだけではなく、教員スタッフ間の協力体制の弱さというのも一つの大きな理由である。

教員の指導体制と学習指導の取り組みについて、以下に具体的な改善策を提示させていただきたい。

本校では、各教科で科目ごとの目標に沿って年間指導計画（シラバス）を作成している。ただ、教科によっては、具体的な指導の仕方を含めて、これだけは教えなければならないという「共通

(ミニマム)の指導内容」の中身を吟味・確認し、さらにそれらの指導の成果を点検することが必ずしも十分ではない。また、教科を超えてそうした業務を行う組織体が本校にはない。つまり、個々の教師の取り組みがあくまで個人の活動にとどまり、必ずしも全体に反映されていない。

例えば、教師の教育力向上のために本校で近年力を入れている公開・研究授業を例にとると、発表者の授業内容については教科内で事前に把握はしているものの、発表者個人のパフォーマンスにとどまるきらいがあり、教科全体として取り組んだ成果をチェックすることが十分にできていない。

あるいはまた、各学年の1学期と2学期に「スタディーサポート」という基礎学力調査と進路指導調査を併せ持った調査を行っているが、スタディーサポートが指摘する各教科の課題(弱点)と毎時間の授業は必ずしもリンクしていないし、学習生活習慣における様々な指摘が必ずしも生徒指導係や保健室に伝わってはいない。

その意味で、今必要なのは、「組織の中における学習指導のシステム化」である。

したがって、上述した機能を備えるためには、例えば教務係を中心とした「学習指導委員会」のような新しい委員会(あるいは分掌)を立ち上げる必要がある、と考える。

学習指導委員会を立ち上げることにより日常的に学習指導がシステム化できる(一人ひとりの教師が、全体のフレームと大きなビジョンの中で生徒に対して学習指導ができる)ようになれば、同じように進路指導のシステム化、生活指導のシステム化も可能になっていくと思われる。

本校の建学の精神や教育ビジョンを実現させるために、指導体制をどう組織化するか、その組織をどう運営していくかという視点を常に持ち続けることが必要であり、教師個人の自覚に訴えるのは、そうした組織がある程度固まってからである、というように考えている。

### 3 関西大学幼稚園

【園長名 石倉 千世】

学校評価のねらいが、「組織的、継続的に教育の改善をし、教育の質と教師の資質の向上につなげることであり、保護者や地域住民から理解を得て、信頼される開かれた学校づくり」であるということから、この取り組みが教師にとって、明日の保育に役立つものであり、教育方針を具体的に明示し関西大学幼稚園の特色を多くの人に知ってもらうことで、幼稚園の発展につなげたいと考えた。

そこで初年度の取り組みとしては、関西大学幼稚園の現状を具体的に明示することに終始し、次年度からは、教育方針と教育内容について踏み込み、教師がそれらをどのように理解し日々保育に取り組んでいるかという観点をより具体的に明示すると共に、自己評価を進めていく。

また、価値観の多様化が進むなか、幼稚園と家庭の連携が幼児期には何より重要なことから、今後の取り組みとして保護者によるアンケートも必須であると考えている。

学校評価を単年度のものとしてではなく、常に振り返りながら丁寧に取り組み、子どもたちの「幸せ」のために質の高い幼児教育が提供できるよう研鑽に努めたい。

## 外部評価委員会規程

制定 平成21年1月29日

(設置)

第1条 本大学における自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育研究水準の更なる向上を図るため、学外有識者による評価を行い、その意見を自己点検・評価活動に反映させることを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の者をもって構成する。

- (1) 常務理事 1名
- (2) 理事長が委嘱する学外有識者 4名程度

(委員長及び副委員長)

第3条 委員会に、委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長は、委員会を代表し、その業務を統括する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、委員長の職務を代行する。

(委員長及び副委員長の選任)

第4条 委員長は、第2条第1号に規定する委員をもって充てる。

- 2 副委員長は、委員長が指名する。

(委員の任期)

第5条 第2条第1号の委員の任期は、役職在任中とする。

- 2 第2条第2号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 前項の委員に欠員が生じたときは、補充しなければならない。この場合において、その任期は、前任者の残任期間とする。

(職掌事項)

第6条 委員会は、学校法人関西大学自己点検・評価委員会が行う自己点検・評価活動に関する評価を行う。

- 2 委員会は、前項の評価の結果を学校法人関西大学自己点検・評価委員会に報告する。

(運営方法)

第7条 委員会は、委員長が必要と認めたとき又は委員3名以上の要求があったとき委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の過半数の同意をもって決する。
- 3 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求めることができる。
- 4 委員会は、審議のため必要があるときは、関係部署に対して資料の提出を求めることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、点検・評価推進課が行う。

(補則)

第9条 このほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の議を経て定める。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。